

暮らしを支えるみなとの情報誌  
Vol.98 November 2021

# 港湾

11 月号

特集

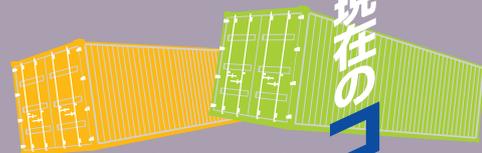
現在の  
コンテナ物流の仕組みを追う！

特別寄稿

「コンテナ全部開けちゃいました！」

株式会社NEXTSTEP制作本部ディレクター

高橋行広



公益社団法人日本港湾協会  
The Ports and Harbours Association of Japan

# みなとまち高砂のすがた—近年の調査成果から—

## かわとうみの結節点・みなとまち高砂

高砂市は、兵庫県南部、播磨地方の南東部に位置し、北と西に山地が連なり、東には兵庫県下最大の流域面積を誇る加古川が流れ、南には瀬戸内海が広がっています。結婚式などめでたいときにうたわれる、謡曲「高砂」ゆかりの地として著名で、かつては白砂青松が広がる景勝地でした。

河川と海の結節点である高砂は、近世以降、姫路藩の拠点港として、物流・文化ともに繁栄しました。元和元年(1615)、一国一城令により高砂城が廃城となった後、港湾都市として整備が進められていきます。碁盤目状の町割りがつくられ、町割りの東側には、加古川の支流である高砂川が南北に流れ、町割りの北側と西側には堀川が存在し、高砂川から町割りの中心部に向かい、南堀川が東西方向につくられました。碁盤目状の市街地には、生業や立地の特徴にちなんだ町名がつけられ、それは現在でも引き継がれています。



空から見た高砂

復元しながら修理工事を実施し、平成30年度より一般公開しています。

## 発掘調査で明らかとなった港湾遺構

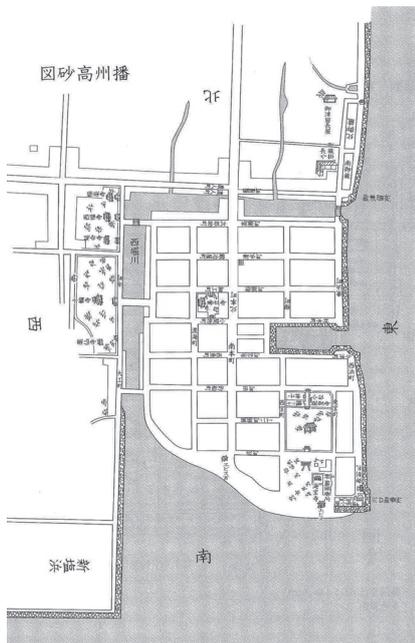
高砂堀川周辺地区整備事業の一環で、南堀川周辺の発掘調査が実施され、江戸時代の湊の姿が明らかになりつつあります。工楽松右衛門旧宅前では、護岸の石垣や雁木という石階段など船着き場の遺構が見つかりました。これらは、江戸時代の高砂の築港技術や湊の変遷を知るうえで非常に重要な遺構です。現在、遺構の大半は地下保存していますが、一部を整備し露出展示として公開しています。

こうした歴史的価値が認められ、平成31年(2019)3月には「高砂堀川湊及び工楽松右衛門旧宅」として兵庫県指定史跡となりました。

その後も調査を行い、令和2年度(2020)の調査では、南堀川の南北の長さが約50mであることが判明しました。これは、幕末に編纂された地誌『高砂

## みなとまち高砂のまちづくり

高砂湊は、姫路藩だけでなく、加古川流域の諸大名藩領や幕府領の物資が集まる、経済的には播磨第一の湊となりました。近代に入っても、河川改修や港湾整備を続け、大正期まで加古川舟運が継続していたことが、最近の文書調査から明らかになっています。

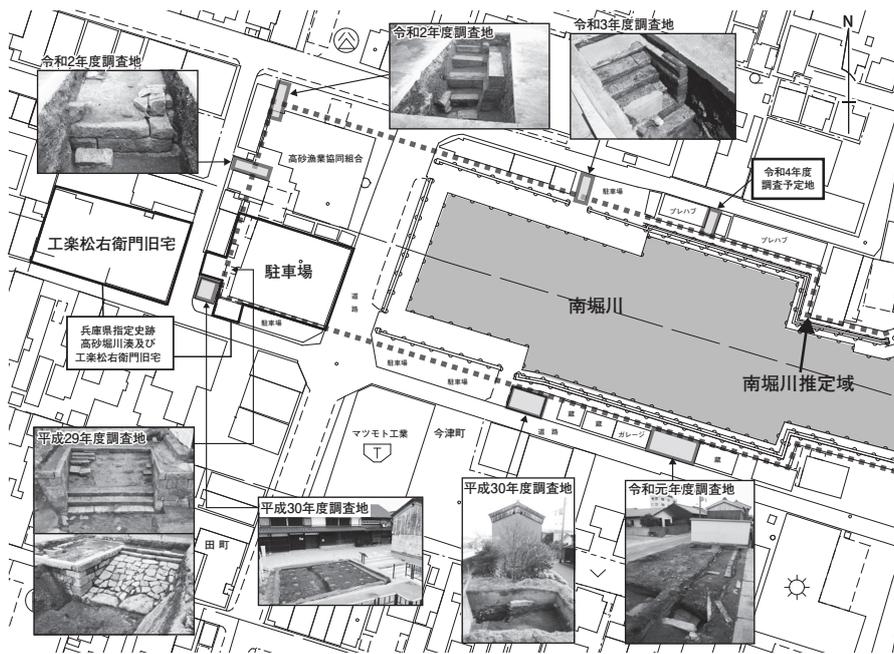


江戸時代の高砂絵図

平成28～30年度(2016～18)には、江戸時代の町割りや古い町並みを景観として保存し、まちづくりにいかすために高砂堀川周辺地区整備事業が行われました。南堀川西詰にある、工楽松右衛門旧宅を拠点施設に位置づけ、当初の建築様式に



工楽松右衛門旧宅と南堀川遺構整備状況



南堀川周辺発掘調査位置図

雑誌』にある「南北二十八間半」という記述とほぼ一致します。また、昭和初期の古写真に写る風景とも一致し、文献・史料等とも合致する成果が得られました。

これまで調査を行った場所は、すべて市有地です。そこから港湾遺構が見つかったということは、港湾としての機能を保ち続けていることを示しています。今

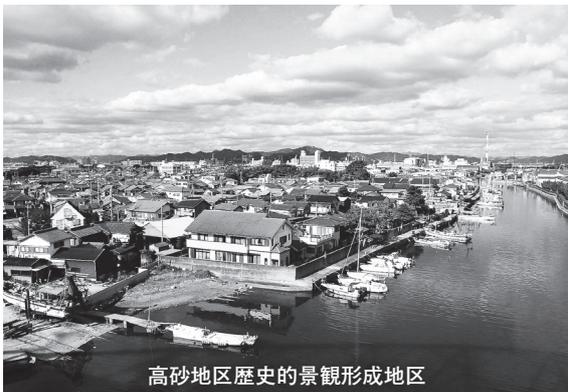
後、県史跡への追加指定を計画しており、今後も調査・研究を続けていく予定です。

### 日本遺産と高砂

高砂市は、平成30年（2018）5月に、日本遺産「北前船」に追加認定を受けました。構成文化財のほかにも、湊に出入りする船を監視するための番所跡である川口番所跡や、姫路藩百間蔵跡、港湾改修の石祠などの遺構が存在しています。瀬戸内海に面する港湾都市のなかでも、近世の港湾施設が比較的まとまって残っており、港湾遺産としても高い価値を有します。また、初代工業松右衛門はエトロフ島

や箱館の湊を整備したり、船の帆布を発明し、海運業に大きな功績を残しました。

工業松右衛門旧宅や南堀川周辺には、江戸時代の町割りに、町屋や寺社、近代建築等が残されています。ここでは、人と物が行き交い、交流が生まれ、文化が育まれました。文化交流の拠点であった高砂の役割を、今に伝える重要な場所であるといえるでしょう。



高砂地区歴史的景観形成地区



工業松右衛門旧宅



高砂堀川遺跡



常夜燈（高砂神社）

日本遺産の構成文化財